

東北地方日本海側における弥生時代の墓

木村 高（青森県埋蔵文化財調査センター）

はじめに

東北地方における弥生時代の墓は、均質な時空間分布を示さない。特に日本海側の事例は、太平洋側に比べ極めて少なく、1遺跡から数基程度の検出パターンが殆どを占め、縄文・古代の遺構・遺物と複合して検出される場合も多い。

1 東北地方日本海側における弥生時代の墓

第1期＝弥生時代前期後葉～中期前葉、第2期＝中期中葉～後葉、第3期＝後期、第4期＝終末期（古墳早期）と区分し、形態の変遷、分布の経時変化、副葬／供献品・着用品、儀礼具・儀礼痕跡、墓群・墓域・居住域との関連、地域間の交流に関する概略を、若干の所見を交えて第1表に示した。

第1期～第4期までの流れを大まかに見渡すと、第2期の前半（中期中葉）までは縄文時代の諸要素が継続（北部では北海道続縄文文化と連動、中部後半～南部では太平洋側の中中部後半～南部と連動）し、それなりの進展をみせるが、中期後葉以降は、墓の存在が希薄となり（住居跡等も同様）、副葬品類の種類も減少することから、かなりの変化が生じた状況を認め得る。

極端とも言えるこの事象の背景を探るには、気候変動や自然災害等の諸情報を総合的に検討する必要がある（山形西高敷地内遺跡では、縄文～平安時代にわたって幾度も洪水氾濫に襲われている（佐藤庄一ほか 1993））。

2 方形周溝墓について

東北地方日本海側における弥生時代方形周溝墓の検出は、現時点ではみられない。初現は古墳時代前期であり、南部山形県域の米沢盆地に認められる。佐藤鎮雄（2011）は、この地域における最古相のものとして、川西町下小松古墳群陣ヶ峰支群の「J-1号墳」（齊藤 2003）と米沢市比丘尼平「1号方形周溝墓」（手塚 1988）を位置づけ、さらに佐藤は「J-1号墳」を「前方後方形周溝墓」としている。

注視したいのは、方形周溝墓と「前方後方形周溝墓」という2つの形態が時空間的に近接して構築されている点と、隣県の福島県域には後期の段階で方形周溝墓は既に存在しているにもかかわらず、米沢盆地にはやや遅れて導入されている点である。米沢盆地という地理的特性より察し、これらは会津盆地周辺を經由して伝播したものかも知れない。

おわりに

古墳時代前期以降、中部～南部の山形県域は古墳文化の中に収まり、周辺地域との関係を深めながら発展するが、一方で北部は、北海道続縄文文化との関係を深めながら、別の文化を形成していく。この要因は、地理的条件が第一に作用していることは確かだが、山形県河原田（中期後葉）にみられる南系統の墓、青森県宇鉄（中期中葉）及び板子塚（中期後葉）にみられる北系統の墓は、その地域における次代の方向性を暗示している。

【引用・参考文献】

- 齊藤敏明 2003『下小松古墳群（5）』川西町教育委員会
柴一郎 1990『はりま館遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書 第192集 秋田県埋蔵文化財センター
佐藤鎮雄 2011『やまがたの古墳時代－最上川流域のムラと古墳－』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
佐藤庄一 1993『山形西高敷地内遺跡 第5次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書 第192集
菅原俊行 1986『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書－地蔵田B遺跡－』秋田市教育委員会
手塚孝 1988『比丘尼平発掘調査報告書』米沢市埋蔵文化財調査報告書 第21集 米沢市教育委員会

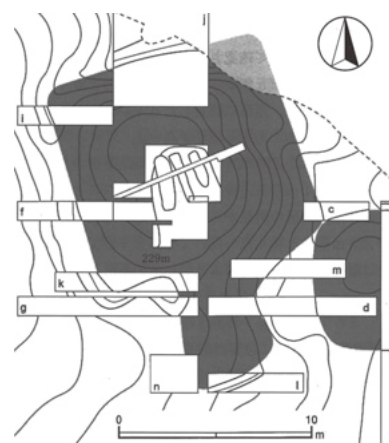
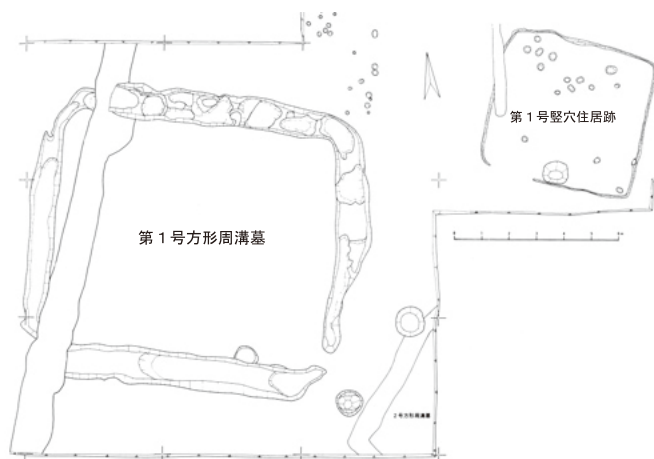
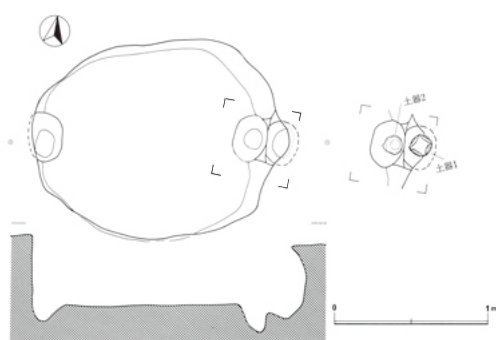
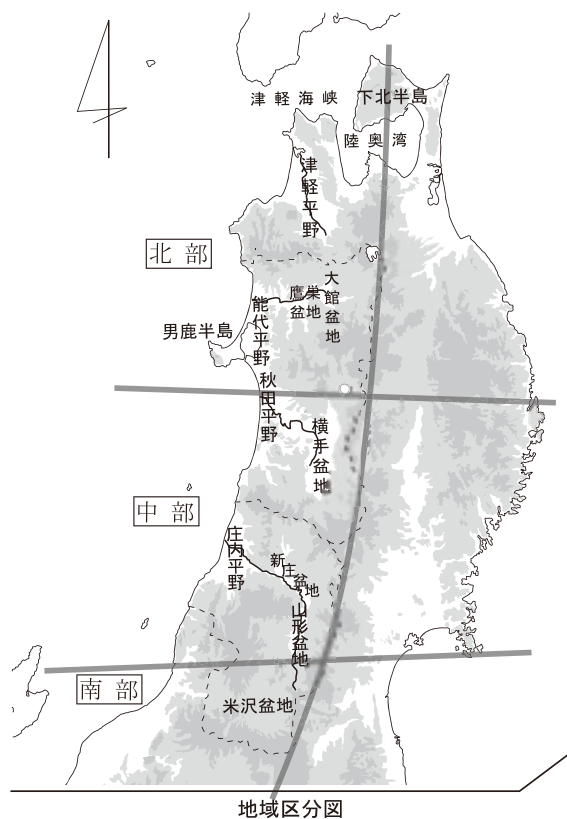
第 1 表 東北地方日本海側における弥生時代の墓（概略）

時期 特徴		第 1 期 前期後葉～中期前葉	第 2 期 中期中葉～後葉	第 3 期 後 期	第 4 期 終末期（古墳早期）
形態 の変遷	複棺型 再葬墓	生石2			
	土器 棺 墓				
	土坑墓				
	木棺墓		河原田		
	方形 周溝墓				※方形周溝墓の初現は古墳時代前期
		土坑墓と土器棺墓の2種認められ、主体は土坑墓。土坑墓の形状は、円～楕円形主体。土器棺墓は中部秋田平野以北に顕著。全てが単棺で、棺身に類遠賀川系の大型広口壺を用いたものが多く、蓋の有無差と、底部穿孔の有無差がある。中部庄内平野の山形県酒田市生石2には複棺型再葬墓が1基あるが、一般例ではない。	土坑墓と土器棺墓が認められる。主体は、北部では土坑墓、中部（山形盆地）では土器棺墓。北部の土器棺墓は広口壺で、中部の土器棺墓は細口壺で器形が異なり、納骨方法に違いがあると推定される。土器棺墓は中期後葉以降消滅。中部山形盆地の河原田（中期後葉）には木棺墓が5基みられ、東北地方における弥生時代木棺墓として明確なものは現時点で本例のみ（註1）。	土器棺墓は消滅し、土坑墓のみとなる（註2）。	土坑墓のみであるが、在来型の土坑墓（弥生系土坑墓）と、北海道統縄文文化（後北C2・D式期）の影響を受けた土坑墓（統縄文系土坑墓）の2種みられる。
		南部以外に検出されている。秋田平野以北に多く、下北半島陸奥湾沿岸や日本海沿岸、津軽・能代・秋田・庄内の各平野にみられ、平野部や沿岸部に目立つ。	北部～南部に広く分布。北部津軽平野・下北半島陸奥湾沿岸・日本海沿岸・津軽海峡沿岸・中部山形盆地・南部米沢盆地にみられる。青森県域における分布状況は以前とさほど変わらない。秋田県域では極端に減少。山形県域では内陸盆地に多くなる。中期後葉以降は全域において減少に向かう。	事例はかなり少ないが、南部以外に認められる。北部では青森平野・鹿角盆地・北部・鷹巣盆地、中部では秋田平野・横手盆地・新庄盆地・山形盆地と、少例ながら分布は広範囲。青森県域の事例が減少。	事例はさらに少ない。分布範囲は北部～中部であるが秋田平野・能代平野・大館盆地周辺と限定的。第3期にみられた広範囲な分布とは異なる。
		土器は供献が主体。検出面～埋土上位からの出土が多く、底面への副葬例は現時点で確認できない。土器に次ぐ副葬品は石器類で、複数遺跡に認められる器種は石鏃。通常は数点の副葬だが、北部津軽平野の弘前市宇田野1号墓からは28点出土しており、統縄文文化の影響と考えられる。着装品としては玉類（垂飾品）が主で、小玉・管玉・勾玉等が認められる。	第1期をほぼ踏襲するが、種類がやや増。北部下北半島陸奥湾岸の板子塚（中期後葉）では、複数の土坑墓に多数の石鏃が副葬され、特に8号墓には特大の石製墓標が伴い、ヒスイ製勾玉・有孔石製品・環状赤色顔料等の着装品の他、134点もの石鏃が副葬されており、統縄文文化の影響と考えられる。着装品としては、北部青森県域・津軽海峡に面す宇鉄（中期中葉）の14号墓の碧玉製管玉356点が著名。宇鉄の副葬土器には、統縄文土器（恵山式）が多くみられる。有機質の着装品としては、北部津軽平野の尾上町五輪野の土器棺墓内から出土したベンケイ貝製の腕輪片がある。	好事例が無いため、確定的ではないが、第2期に比べ種類は減り、土器と数種の石器（石鏃・スクレイパー・石斧等）という程度。石鏃は、アメリカ式が顕在化。着装品は現時点で確認できない。	ほぼ第3期を踏襲すると思われる。弥生系土坑墓では土器・アメリカ式石鏃がみられ、いずれも供献。統縄文系土坑墓である北部能代平野の秋田県能代市寒川Ⅱでは、上面への土器供献と底面への土器副葬が1つの土坑墓で組み合わせられている。寒川Ⅱでは、刀子・鉄斧といった鉄製品が含まれている。
		儀礼具とみられるものは、剥片およびそれに付随する石器等。北部日本海沿岸・青森県深浦町津山の4号墓には、石核・剥片・凹石が伴い、下北半島陸奥湾岸・脇野沢村瀬野の土坑墓では、検出面に30点前後の自然石。儀礼痕跡とみられるものは、土坑墓底面に残るベンガラ。宇田野では5基の土坑墓のうち1基に、北部津軽平野の平賀町大光寺新城跡では5基の土坑墓のうち4基にベンガラが検出。	儀礼具は、宇鉄・板子塚の両遺跡から玉髓や珪質頁岩、黒曜石の剥片がみられ、葬送時における各種石材の破砕行為が推定される。宇鉄では3基の坑底にベンガラがみられ、坑外においてもベンガラがブロックで検出されており、墓域内でのベンガラ粉末の調整行為が推定される。	北部秋田県域・鹿角盆地北部の小坂町はりま館D区的事例より、供献土器は、土坑墓上面で意図的に破砕されている可能性がある。土坑墓上面およびその周囲に焼土がみられ、焚火行為の存在が推定される。	不明。
		墓域の好例は、秋田県八竜町館の上と秋田市地蔵田。両遺跡とも土坑墓と土器棺墓が同一空間に併存していた可能性示す。館の上は土坑墓56基と土器棺墓24基、地蔵田は土坑墓51基と土器棺墓25基で墓域を構成。地蔵田の墓域は、居住域に隣接。墓域は「北東群と南西群」に分かれている（菅原ほか 1986）。	北部では、青森県川内町板子塚、同県津軽半島先端の三厩村宇鉄、中部では山形県山形盆地の山形市河原田（中期後葉）、南部では、山形県米沢盆地の南陽市百刈田、米沢市堂森が挙げられる。宇鉄（中期中葉）では、土坑墓16基と土器棺墓4基が共存していたとみられる。広い空間がありながら、多量の管玉を有する14号墓の付近に4基の土坑墓が重複している。板子塚からは土坑墓14基（註3）が検出され、多量の副葬石鏃を有する8号墓を中心に他の土坑墓がまとまる傾向がある。河原田（中期後葉）では、木棺墓群から約15m、約10m、20mの離れたところに「住居跡」が3軒検出されている。	一定範囲に数基の墓がまとまる状況は検出されていない。北部の小坂町はりま館D区からは、住居跡1軒・井戸跡1基・土坑墓6基が検出されている。土坑墓にまともりは認められない。これら3種の遺構は4時期に分けられ、Ⅱ期とされた段階では、住居から南西に10m、西に35mのところ土坑墓が1基づつ構築されている（榮ほか 1990）。	寒川Ⅱでは6基の土坑墓が逆J字状に並んで検出されている。
地域間の交流	墓群・墓域・居住域との関連				
	地域間の交流	生石2の土坑墓は18基。うち1基（SK25）は、土器5点が正立状態で埋置された複棺型再葬墓。福島県域・宮城県南部からの伝播と考えられる。	北部の宇鉄14号墓の管玉は、分析8点のうち不明3点を除く全てが新潟県佐渡猿八座、板子塚8号墓の石鏃に含まれる黒曜石製4点の産地は全て北海道十勝産、ヒスイ製勾玉は新潟県糸魚川産。玉は北陸、黒曜石は北海道、というルートがある。山形盆地の河原田（中期後葉）の木棺墓5基は七浦式（桜井式並行）期のもので、板状木質と樹皮状木質の2種がある。	墓および副葬品等の情報が少なすぎ、地域間交流を考えるに至らない。ただし、土器は天王山式系、石鏃はアメリカ式が顕在化することから、地域間交流は広いと推定される。	寒川Ⅱの土坑墓6基の全てに、北海道統縄文文化由来の柱穴状ビットが伴う。副葬土器は、統縄文土器（後北C2・D式）が主体だが、1基には十王台式系壺が伴う。土坑墓構造と主体の副葬土器は統縄文文化の要素、副葬鉄器と十王台式系壺は南からの搬入と考えられる。

（註1） 報文では、河原田遺跡の南方約1.5kmに位置する江俣遺跡と仙台市西台畑遺跡でも木棺墓の可能性をもつ土坑墓が検出されているという（木質の残存は無い）。

（註2） 第3期に数例みられる土器埋設遺構は、土器棺墓とは見なしがたい。

（註3） 報文における土坑墓数は1基であるが、今回の検討で中期後葉に属す土坑5基を土坑墓に加え、計14基とする。



第1図 地域区分図・各地の弥生時代の墓・方形周溝墓と前方後方形周溝墓（古墳時代前期）